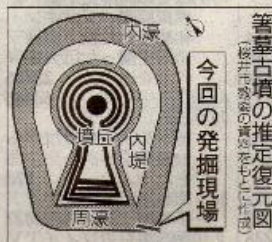


箸墓古墳に眠るのは…

浮かぶ強大な権力者

大規模な周濠が初めて確認された、最古の巨大前方後円墳、箸墓古墳（奈良県桜井市）。これまで周濠の明確な痕跡は確認されておらず、学界でもその存在を疑問視する声が強かったが、墳丘を取り巻く巨大な周濠が築造当初から整備されていた可能性が高まり、当時としては類をみない大規模な土木工事を可能にした強大な権力者の威光を浮かび上がらせた。古墳に眠るのは卑弥呼なのか。再び邪馬台国へのロマンが広がった。（1面参照）

大規模周濠確認



同古墳の墳丘は宮内庁の陵墓に指定されており、学術目的の発掘調査ができません。

周濠の一部の落ち込み状遺構。古墳前方部（奥）に向かって広がっていた
＝6月、奈良県桜井市（小畑三秋撮影）

当時、類を見ぬ土木工事

そのため、被葬者の納められた石室の構造などは、厚いベールに包まれている。こうした中、桜井市教委や奈良県立橿原考古学研究所は10年以上前から墳丘の周辺を丹念に発掘し続け、ようやく大規模周濠の存在を突きとめた。市教委の橋

本輝彦主任は「60年以上という周濠の幅は、実に古墳1つに入るほどの大きさ。周濠によって、被葬者と外部との隔絶性をより明確にしたのだろう」と推測する。

その被葬者はいったい誰なのか。中国の歴史書「魏志倭人伝」には、2人の女王が登場する。それによると、呪術を通して君臨した卑弥呼の死後、戦乱が起こったが、卑弥呼一族の女性・臺与を後継に立てることでよ

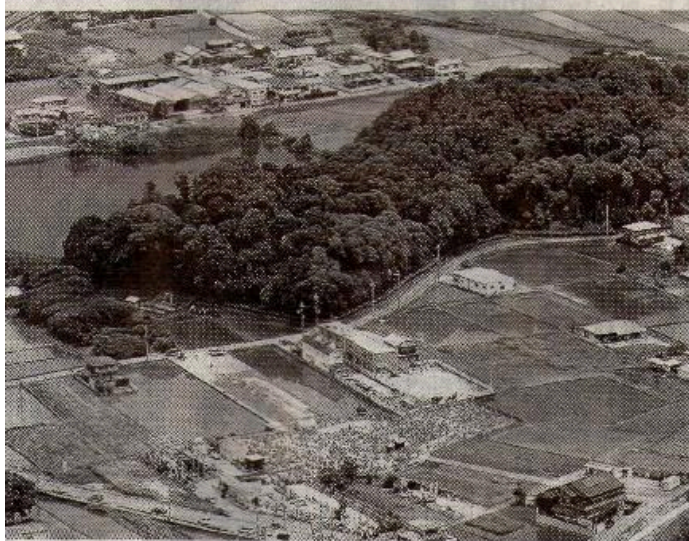
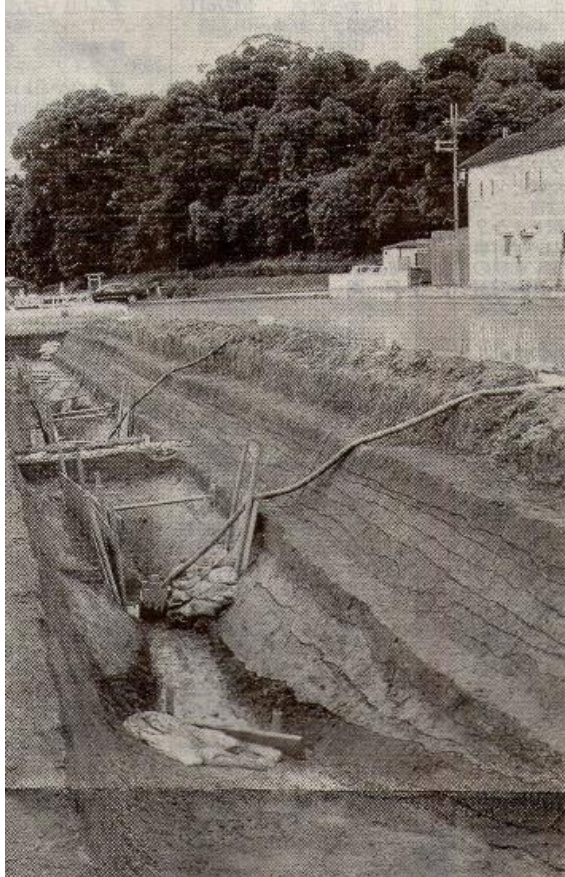
うやく収束したという。卑弥呼の死は248年ごろとされるため、箸墓古墳の築造時期こそが力ギを握る。しかし、築造年代の根拠となる土器をめぐっては、研究者によって数十年の開きがあり、いまだに論争の決着には至っていない。ただ今回、被葬者の強大な力リスマ性を物語る大規模周濠が確認されたことをきっかけに、被葬者論争はさらに高まりそうだ。

3世紀中ごろの築造説を採る白石太郎・奈良大教授（考古学）は「箸墓古墳を造るには10年以上かかる、卑弥呼の墓の時期に合致する」と卑弥呼説を提唱。「周濠などの調査は構造を明らかにする上で極めて重要。国なども本格的に乗り出すべきだ」と強調する。

一方、築造は260～280年とみる寺澤薫・橿原考古学研究所総務企画部長は「被葬者は卑弥呼の後の臺与か、その後の男王では」と推測。卑弥呼の時代はライバルの狗奴国があり、決して万全な体制ではなかったとして、「男王の時代に王権の力が全国に及び、巨大な箸墓古墳を築くことができたのだろう」と指摘する。

同様に、卑弥呼説に否定的な石野博信・兵庫県立考古博物館長も「被葬者は臺与」の立場。「3世紀後半には全国の土器の動きが活発になり、交流や戦争などさまざまなことがあった。臺与は、魏志倭人伝にあまり記述がないが、業績は大きかったはず」と推測している。

発掘現場はすでに埋め戻され、現地説明会はない。



大規模周濠の存在が初めて確認された箸墓古墳と発掘現場（中央下）
6月、奈良県桜井市（本社ヘリから、大塚聡彦撮影）

箸墓レーザーで丸裸

後円5段・前方3段明確に

最古級の大型前方後円墳で、邪馬台国の女王・卑弥呼の墓との説もある奈良県桜井市の箸墓古墳（3世紀中ごろ）後半、全長約280メートルを上空からレーザー測量し、従来の測量図より格段に精度の高い情報が得られた。県立橿原考古学研究所が5日、発表した。「時期による古墳の形の変化を考えるうえで貴重な情報だ」という。

箸墓古墳は宮内庁指定の陵墓として立ち入りが制限され、昭和初期までに作られた高さ1メートルの測量図しかなかった。橿原研は4月、航空測量会社「アジア航測」

（本社・東京）と協力し、ヘリコプターからレーザーを使って古墳を測量、50メートルほどの大きさのものを把握できる立体地図を作った。墳丘の段数は、後円部が5段、これまで諸説があった前方部は3段であることが明確になった。後円部の墳頂の円丘を囲むように、高さ約40メートルの環状の高まりがあることも確認された。

立体地図は6月17日、同県橿原市の橿原研付属博物館（0744・24・1185）で公開する。

（塚本和人）

デジタル版に動画

①箸墓古墳の航空写真（画像を一部補正）②航空レーザー測量による箸墓古墳の立体地図＝いずれも奈良県立橿原考古学研究所、アジア航測提供



纏向遺跡に卑弥呼の館？

纏向遺跡が邪馬台国の中心とされる理由は、卑弥呼の墓説が根強い箸墓古墳（全長280メートル）など、域内に邪馬台国時代の最古級の前方後円墳が次々と築かれたためだ。今回の調査で見つかった大型建物跡は神殿を思わせる高床式と想定され、権力の象徴である古墳に加えて、宮殿とみられ

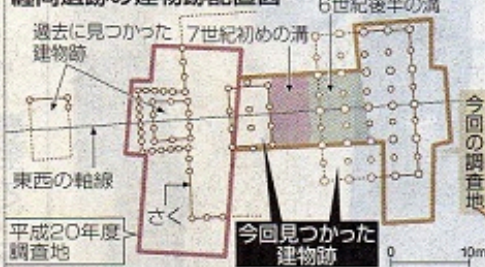
卑弥呼の館がついに姿を現した。奈良県桜井市の纏向（まきむく）遺跡で見つかった大型建物跡は、邪馬台国を探し求める研究者たちを色めき立たせた。「まさに国家的祭祀（さいし）が行われた政治的空間だ」と畿内説を勢いづかせる一方、「卑弥呼とは半世紀以上の隔たりがあり、九州説は揺るがない」とさっそうと反論も。魏志倭人伝に記された「女王の都する所」をめぐるロマンは尽きない。（1面参照）

研究者ら興奮、異論も

る建物群跡がついに発見された。

「高床式建物はまさに卑弥呼の宮室」と明言するのは辰巳和弘・同志社大教授（古代学）。過去の発掘では大型建物跡の近くから祭祀用の井戸跡とみられる遺構が見つかり、建物群の西側には最古級の前方後円墳が集中している。辰巳教授は「前方後円墳、祭祀のための聖水をくむ井戸、計画

纏向遺跡の建物跡配置図



畿内説 「政治的な空間」

「時代に隔たり」九州説



的に配置された建物群が一体として存在する構造は、卑弥呼の祭祀空間によさわしい」と語る。

魏志倭人伝によると、卑弥呼が治めた倭国は30の国々からなる連合政権ともいわれる。金関孝・大阪府立弥

生文化博物館長は「これだけ大きな建物なら、連合国の代表が集まって合議をした議場ではないかと話す。千田稔・奈良県立図書館報館長（歴史地理学）は、東西に並ぶ建物群の配置に着目し「太陽の動きを中心軸としており、太陽とともにある日本人の宇宙観や精神性を示している」と推測。「卑弥呼とは、太陽（日）の巫女という解釈と無関係ではない」と話し、神秘性に迫る。

一方、九州説の高島忠平・佐賀女子短大長（考古学）は「見つかった土器などから、大型建物跡は4世紀以降で卑弥呼の時代より50年以上新しいはず」として邪馬台国との関連を否定。「魏志倭人伝に記された城柵や楼観を思わせる遺構が見つかった吉野ヶ里遺跡（佐賀県神埼市、吉野ヶ里町）などが有力であることは変わらない」と主張した。

箸墓古墳をはじめ、邪馬台国時代の最古級の古墳が集中する纏向遺跡一帯は、奈良県桜井市（本社ヘリから、鳥越瑞絵撮影）

